

「縄文農耕」はあったか

川崎 花香 小屋 忠士

植物にみられた変化 から縄文時代の人々が
どれほど深く植物と関わっていたかを明らかにする。



～栽培化症候群～

休眠性の喪失
防衛機能の喪失
完熟の同時性
つる性の喪失
種子の大型化
脱粒性の欠如

方法 土器圧痕を用いる

- ・圧痕の大きさ
 - ・圧痕の表面 (ワックスブルーム)
- 縄文前期・中期両方の土器が出土する堰口遺跡の資料を使用

表1 各資料の個数

時期	(個)
縄文前期	34
縄文中期	14
全体	48

ブルームの有無	(個)
ブルームが確認できる	15
ブルームがやや確認できる	14
ブルームが確認できない	12
不明	7

□ 前期 □ 中期

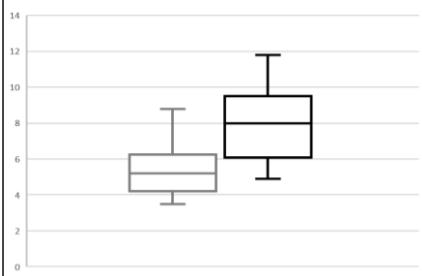


表2 圧痕の全長の平均値 (mm)

	前期	中期	全体
前期	5.3		
中期		8.0	
全体	6.1		

前期から中期にかけ
種子が大型化している

⇒栽培化の可能性大

□ ブルーム有 □ ブルームなし

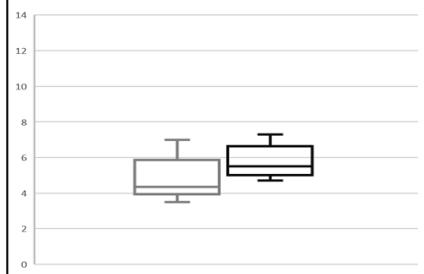


表3 前期・中期、ブルームの有無別の圧痕資料の個数と全長の平均値

個数	(個)
前期の圧痕でブルーム有	18
前期の圧痕でブルームなし	10
中期の圧痕でブルーム有	11
中期の圧痕でブルームなし	2

全長の平均値	(mm)
前期の圧痕でブルーム有	5.2
前期の圧痕でブルームなし	5.8
中期の圧痕でブルーム有	7.7
中期の圧痕でブルームなし	9.2

- ・前期のほうがワックスブルームのない個体が多い
※中期の資料不足の可能性
- ・ワックスブルームのない個体⇒大きい傾向

考察

堰口遺跡には…

- ・前期～中期にかけた植物の栽培化現象
- ・種子の大型化とワックスブルームの喪失が
同時に起こった可能性

しかし、現時点ではワックスブルームの喪失が
この期間に起こったとは言えない

課題は…

資料の数・具体的な栽培化の進行具合の調べ方

参考文献

鈴木公雄 (1979) 「縄文時代論」

『日本考古学を学ぶ』 有斐閣

中山誠二・金子直行・佐野隆 (2016)

「越後山遺跡のダイズ属の種子圧痕」 『日本考古学会誌』 第24号

重田眞義 (2009) 「ヒト-植物関係としてのドメスティケーション」

『ドメスティケーション-その民族生物学的研究』